

## 2005年度 森村・川村ゼミ議事録

10月5日分

記入者: 鯨井留実

司会者: 元島瑞貴

文献: Hannah Higgins『Fluxus Experience』Ahmanson-Murphy Fine Arts Book S.2002  
Chapter1:Information and Experience

発表グループ: 石原・山田・岩永

### 議題

「フルクサスはアートかギャグか? (→五感を呼び覚ますことがなぜ大切なのか?) から議論開始

### グループの考察

今回私たちは「フルクサスとは何だったのか」という問いをたて、それに対して具体的な彼らの作品やパフォーマンスが私たちに何をもたらしてくれるのか、また「芸術」的な観点からフルクサスを捉えた場合それをどう説明しうるか、という2つの観点からアプローチを試みた。

例えば、Ay-Oの『Finger Boxes』では指を箱に突っ込むことによって、体験者の未知なる感覚を呼び覚ますように、フルクサスの作品やイベントは五感全てを開放させ、自分と世界のつながりを強固にすることをゴールとした。ケージからフルクサスへの思想が受け継がれる点は先に見てきたが、『4 '33』を通してケージが私たちの「聴覚」を呼び覚まし、私たちが生きている生活そのものに目覚めさせようとしたことも、フルクサスのゴールに対しての原点であったと考えられる。

またフルクサスの活動をはたして「アート」と呼べるか、という問いについて筆者のH. ヒギンズはアートの3つの特徴を取り上げることによって肯定的な答えを述べようとしている。確かに筆者が述べるように「アート」とはなにか私たちに幸福なものをもたらしてくれるものとして、ある種の約束事と化しているといえるかもしれない。むしろフルクサスのアーティスト達は、その『アート』の社会における位置づけを意図的に利用してアーティスト活動を行っていたと考えることも出来ないだろうか。

フルクサスを率いたG. マチューナス本人が「フルクサスはギャグだった」と言明しているように、彼らの功績を単なる「ギャグ」として片付けるのか、それともやはり私たちの意識の深層に潜むアートへの期待に応えてくれるものとしてみるのか。その判断は、アートを通じて人々を「生に目覚めさせる」というケージの真意を読み解くことに委ねられている。

## 議論の展開

### 議題1: 五感を呼び覚ますことがなぜ大切なのか？

● アートと向き合う時、  
普通目で見て、耳で聞くということが重要

⇔フルクサス的には触覚、味覚、嗅覚も重要

意見:「フルクサスの芸術を体験したとして、その体験＝アートととらえることができるのか？」と、考えると、考えられない

● 発表者としての意見を文献を通して考えると、どのように捉えられているのか？  
アートとして、経験していないのでは？

↓

班の見解として:フルクサスの芸術の体験こそは生活であり、アートではない

● 五感を呼び覚ます＝私たちにメタリスティックのような Special な体験

五感を刺激する:例)ザラザラしたものを触る→ザラザラであるというリアリティー

マチュウナスの作品:経験して、考える→『何この経験?』と、思うことによってその感覚が刺激される＝感覚が目覚める

チェスの駒:「社会的地位の境界と流動性の対比」の意味は??

→私たちがその空間にいなくても、作品を見た後に「あれは何だったのか?」と考えさせるのが目的

0'00" どこがフルクサス的なのか?

→ケージは時間を意識させたかった

4'33"→0'00":さらに日常的になった

● 生活の中に芸術を持ってくること

⇔芸術の中に生活を持ってくること

疑問:↑この2つはイコールといえるのか??

→普通に紙面に何か書いているのは「生活」。でも、0'00"は「芸術」と捉えられていた。その差は何か?・・・アートとして見せることによって「アート」??

—————ここで、ディベート開始—————

※フルクサスをアートと思うか、ギャグと思うか、2つの班に分かれて・・・

議題2:アートか、ギャグか?

ギャグの定義:ジョーダン・悪ふざけ・ペテン

アートの定義:芸術

●自分達自身どう思うか？

例)バイオリンを壊す

チーム・ギャグ:笑が起きたという記述がある=ギャグ

固定観念を崩されたら、人はジョーダンと思う=ギャグ

ー何をアートとするかー

チーム・アート:楽しみもアートなら、ギャグは皆アート=アート

行った人で考えると。。芸術という概念があるときにおこなった人々は、その精神がアート=アート

→・ 楽しい、悲しいという感情はどうでもよく、日常ではない、ただ新しい体験をさせてくれるのが「アート」

・ ギャグとも言い切れない/しかし、アートとも言い切れない:経験を振り返ったときにギャグであったと感じる可能性は大いにあるから

● フルクサスのものをアートととるか、とらないかということではない・・・

記入者の考察

この議題によって、アートという概念の難しさを改めて知ったとともに、アートの可能性の広さを実感した。行う人がアートと思えば「アート」なのか、観衆がアートと思えば「アート」なのか、メディアという媒体が騒ぐことによってアートと化すのか。今後も「アート」とは何なのか、という問いは私たちに疑問とともに新しさも与えてくれるかもしれない。考え続け、自分なりの定義が出るまでとことん突き詰めて行きたいと思う。